



学校法人 電子開発学園

北海道情報大学

Hokkaido Information University



2020年  
6月発行  
通巻 第25号

# FD・SDニューズレター

Hokkaido  
Information  
University

## 巻頭言

### 危機をチャンスに変える

情報メディア学科  
教授(FD委員長) 隼田 尚彦

10年以上前、「試される大地北海道」というキャッチフレーズが使われていました。ここには、「自らに問いかけ」「世に問う」という文脈で、自らの未来への挑戦や可能性に目を向けていこうというメッセージが込められていました。

今年に入ってから、新型コロナウイルスが猛威を振っています。ハーバード大学の試算では、2022年まで外出自粛が必要となる可能性もあるようです。この非常事態は、まさに我々が試されているのだと思います。

本学では、教職員の状況に応じた在宅勤務や遠隔授業の推進が、澤井学長と安倍事務局長から示され、この危機に対応しています。このような事態においては、リスクマネジメントの観点から、最悪の事態を想定した方策や行動が求められます。一方で、教育に携わる者として、学生生活をどのように担保し、学生の勉学や生活を支えることができるのかという視点との衝突に悩む事も多いと思います。

再開された中学校などでは、すぐに部活動が普通に行われたりもしています。このことに対して、「このようなストレスのかかる事態であるがゆえに、部活動が子供の精神衛生に良い影響を与えるということを考慮した」と某市の教育委員会は回答しています。しかし、このような非常事態下で、安易にそのような判断を下すというのは、あり得ないことだと考えます。まずは、安全であることと、命を守ることを最優先にするべきでしょう。

翻って、本学の状況を考えてみます。ユニバーサル化した大学環境において、極めて多様な学生を受け入れている本学では、遠隔授業を自律的に受講できない学生が相当数いると考えられます。それは、通学できずに通信教育部に転籍となった学生の多くが卒業にこぎつけられていないことから分かります。何年もの間、義務教育のように、一人一人の学生に対して、きめ細かい指導を行ってきているにも関わらず、それでもドロップアウトしてしまう学生が後を絶たないわけですから、そういう学生に対して在宅で受講させることは至難の技です。それでも、本学に限らず大学はどこも、遠隔授業を行ってしのぐという前提条件が与え

## 目次

1. 巻頭言..... 1
2. 北海道FDSDフォーラム2019参加報告 ..... 3
3. イベントの企画・実施小委員会の活動報告 ..... 4
4. ICT活用による教育イノベーション推進小委員会の活動報告 ..... 5
5. 新しい教育方法検討小委員会の活動報告 ..... 7
6. SD活動報告 ..... 10
7. FD・SD関連行事および活動実績 ..... 12
8. 編集後記..... 12

られての新年度スタートとなっていました。

Facebookに「新型コロナ休講で、大学教員は何をすべきかについて知恵と情報を共有するグループ」という公開グループが設置されています。私も安倍事務局長の紹介で、4月上旬からこのグループのメンバーです。ここでは、Zoomなどの活用法やオンデマンド授業用のビデオデータの圧縮方法といった技術的な内容から、対面授業に代わる遠隔授業の教授法アイデアまで様々な情報共有がなされています。ここで感じたのは、首都圏に対して、札幌圏の情報インフラなどの脆弱性です。同じようなツールを使用しているも、学生の受講環境にかなりの隔りがあると感じています。

しかし、遠隔授業が本学学生の大半に有効ではない、十分な教育効果が見込めないと断定してしまうのは賢明ではありません。

今の学生たちは、デジタルネイティブなZ世代です。毎日、YouTubeやSNSなどを活用して情報を得ています。そこには、eラーニングが教育方法の一つとして十分に力を発揮する素地が整っているとも考えられます。

本学では、eラーニングシステムであるPOLITEを活用したブレンDEDラーニングに取り組みできました。eラーニング教材として反転授業ビデオを準備されてきた先生もいらっしゃると思います。それらの効果的な長さは10~15分と言われており、YouTubeの標準的な長さと同じです。YouTubeなどの動画は、

視聴者が望むスピードで再生することが出来たり（POLITE3には機能がありません）、繰り返し授業内容を確認したりすることも出来るため、集中力が持続しない本学学生でも、本人次第で対面授業よりも高い学習効果を見込むことが出来ます。実際に、ゼミ生などの一部学生に確認したところ、遠隔授業の印象はそれほど悪くはなく、リアルタイムのビデオ授業よりもオンデマンドのビデオ授業の方が好ましいとの回答が多くありました。理由としては、繰り返し視聴できることが挙げられています（このことに関しては、後日、全学的な調査を行う必要があると思います）。

本学でもPOLITE3にビデオ教材のようなリッチコンテンツを配置し、ある程度の数の学生が一斉にアクセスする状況となりました。御多分に洩れず、本学ネットワークの帯域問題が浮上しました。この問題に関しては、設備増強に動いています。

そうした中で、今年度は授業ビデオ中の著作物に対して権利問題の猶予が取られることになってはいるものの、使用方法によっては扱いが難しいため、YouTubeなどで広く公開する事をためらわれる方もいらっしゃると思います（限定公開もブログ等でURLをリンクされると、広く一般に見られてしまいます）。ところが、非公開映像を大学ドメイン内だけで共有するという方法があることがわかりました。これを活用すると、著作権問題も一応はクリアになり、さらに学外の映像専用サー

バーに映像を保管して公開ができるため、ネットワークに不要な負荷をかけることもありません。

また、ビデオ会議システムを用いた授業のために、在宅勤務が可能となっています。ライブビデオによる授業は、録画ができるため、多少の編集は必要となりますが、授業後に公開することで、オンデマンド教材として使うこともできます。オンデマンドだけでは、自律的に学べない学生でも、対面授業の代わりにライブビデオによる授業を織り交ぜることで、受講を促すことができるかも知れません。

Z世代だけに、チャット機能などで発言させると、対面授業での発言よりもずっと多くの学生が質問や意見を出すので、かえって能動的な授業参加が望める気もします。

つまり、我々よりも、遠隔授業への学生の対応力の方が、高いのかもしれないのです。

我々が、従来型教育手法とは違った手法を遠隔授業の実践の中で身につけることは、Z世代やその後続く新しい世代へのより効果的な教育手法を身につけることに他ならないと言えるでしょう。

我々の前に立ちはだかる問題にも、必ず解決できる道があります。今、我々は試されています。この危機を乗り越えるための情報と技術を共有し、新しい教育スキルを身につけることができるかを…。

## 北海道FDSDフォーラム2019参加報告

情報メディア学部 情報メディア学科  
教授 山北 隆典

### 1. はじめに

本フォーラムは、北海道FD・SD協議会が、北海道内の高等教育機関のみならず、全国の教育機関関係者と高等教育に関する情報交換や意見交換を行い、直面している課題を解決するための学びの場となることを期待して、FDやSDに関するテーマを取り扱うイベントです。今年度は、令和元年9月6日（金）、7日（土）に、北海道大学高等教育推進機構高等教育研修センターで開催されました。本稿では、1日目の基調講演、及び公開討論について、その概要を紙面の許す範囲で報告します。

### 2. 基調講演

宇都宮大学の石井和也先生から、「学修成果可視化の取組みと課題」というタイトルで、宇都宮大学が「大学教育再生加速プログラム（AP）事業」として平成31年度までの5年間に取組んできた活動について報告されました。

非常に大雑把な捉え方をすると、能動的学修を評価する指標として「行動的知性」を体系的に整理し、「行動的知性」の到達度合いをチェックシートとして可視化している、という内容でした。チェックシートは個別指導の際に活用しているようですが、教員が指定した能力と学生が実感した能力に大きなずれが見られるなどの、課題が見えてきたようです。そこで、学生にとって意味のある学修成果可視化の実現を目標に定め、入学から卒業までの連続的で全学的な学部レベル教学マネジメントの中に学修成果可視化を位置づけ、チェックシートの改善に取り組んでいるという報告でした。

基調講演のポイントは、そもそも学修成果可視化が大学教育の質保証・向上に資するための一つの取組みですから、もう一度原点に立ち返り、学修成果可視化だけではなく、新しい入試体制や教育課程・授業科目の再検討も含めた、一体のものとして取組むことで、大学教育の質保証・向上を目指すことに舵を切った点にある、と感じました。そのために、宇都宮大学では、学務・情報担当理事を統括とし、他の理事や各学部教員、基盤教育センター教員、学務部学修支援課職員など教職員10名による教育戦略企画チームを構成して、取組みを進めているとのこと。講演の報告資料の最後には、「学修成果の可視化は教学マネジメントの原動力として機能することが期待される」と結んでいます。

### 3. 公開討論

基調講演に引き続き、「学修成果可視化の取組

み」と題して公開討論が行われました。司会を北海道大学の山本堅一氏が務め、北海道文教大学の松岡審爾氏、旭川工業高等専門学校の高野耕司氏、本学から山北がパネリストとなり、各教育機関での取組みを紹介するとともに、成果や課題を共有しました。

松岡氏からは、学修成果及び学修行動の自己評価による調査、年次ごとのディプロマ・ポリシー別のGPA（学科平均、個人別）の取得を行い、両者の関連を検証中であるとの報告がありました。

高野氏からは、実験スキル（実験を通して、何ができるようになったか）の可視化の取組みが紹介されました。3段階の到達レベルを設定し、それぞれのレベルに準拠した実験書と評価シートを作成して、教員及び学生相互の客観的評価に活用しているという報告がありました。

本学からの報告では、本学ではディプロマ・ポリシーに基づいて、育成すべき人材像とコンピテンシーを設定していること、コンピテンシーと各科目を関連付けていること、個々の学生の学修成果をコンピテンシーの達成度としてLMSであるPOLITE上で可視化していることを紹介しました。また、これによって、学生の修学意欲向上、及び教員による履修指導、個別指導への活用を期待していることも併せて報告しました。ただし、その期待通りの成果が得られているかを検証することが今後の課題の一つとして感じていることを、私見として付け加えさせていただきました。

### 4. まとめ

現状では「学修成果」の定義が曖昧であると認識していますが、「学習成果可視化」は、教育の質保証・向上という観点から、高等教育機関として対応しなければならない課題である、という現実に苦しんでいる様子が語られていたと感じました。学生目線で、学生にとって意味のある活動にすべきであるとの意見に共感を覚えたフォーラムでした。

なお、筆者が十分に理解できていない点や誤解している点があるかもしれません。ご容赦願います。



（撮影：本学事務局長 安倍 隆氏）

## イベントの企画・実施小委員会 活動報告

経営情報学部 先端経営学科  
教授 福沢 康弘

### 1. はじめに

イベントの実施・企画小委員会は、FD委員会の主催するイベント（事業）の企画・実施を担当しています。2019年度は、新任教員研修、ピアレビュー、授業評価アンケート、FD・SDフォーラムが主な実施イベントとして計画されました。以下、順にご報告します。

### 2. 新任教員研修

2019年度は4月に3名、9月に1名の新任教員が着任しました。この4名の先生について、新任教員研修を実施しました。それぞれ着任時に第1回研修を行い、11月に全員で第2回の研修を行いました。第1回研修は本学のFDに関する基本的知識を学ぶことを目的に、①本学のFD活動、②学生指導について、③ハラスメントについて、④本学の多様な学生について、の4項目で講習を行いました。また合わせて、本学独自のFD支援ツールであるCANVAS講習も実施しました。

第2回講習は、本学の国際交流について理解を深めることを目的に「本学の国際交流の現状」と「国際コラボレーションについて」をテーマに行いました。

本学ではアメリカ事情、中国事情、マレーシア短期留学をはじめ、各国の大学と提携した留学プログラムが多数用意されています。また国際コラボレーションは本学最大の国際交流事業であるといえます。これら多彩なプログラムが用意されている本学において、世界に目を向けることの大切さを学生へ伝えていただき、サポートへの協力をお願いしました。



第2回新任教員研修（2019年11月21日）

### 3. ピアレビュー

例年通り、前期・後期とも全教員が授業レビュー

を行い、CANVASに記入するとともに、事後検討会を行いました。2019年度も実施率100%を維持することができました。

### 4. 授業評価アンケート

例年通り、前期・後期の授業を対象に授業評価アンケートを行いました。回答率（回答数÷出席学生数）は通年で99.12%となり、目標である回収率100%をわずかに下回る結果となりました。2018年度は回収率100.68%だったので、少し残念な結果となりました。

#### 2019年度授業評価アンケート実施結果

履修者数	出席学生数	回答数
27,253	17,577	17,423

回収率 99.12%

また、これはデータを取得できたサンプルのみでの数字であり、非常勤講師担当科目を含めた全授業で完全に実施できているわけではありません。本学の中期計画において、授業評価アンケートは回収率100%の定着を図ることが目指されています。次年度も引き続き、全授業で完全実施を行い、かつ回収率100%を達成できるよう、教員のみなさまのご協力をよろしくお願いいたします。

### 5. FD・SDフォーラム

2020年3月6日に「教育イノベーションの道を探る」をテーマに開催する計画でした。近年、アクティブラーニングやPBL等での学生の取り組みを評価する手法として、ループリックが注目されていることから、北海道大学高等教育推進機構高等教育推進センター特任准教授の山本堅一先生をお招きし、ループリックの基本知識についてご講演いただく予定でした。合わせて、eスポーツを通じた新しい教育手法に取り組んでいる情報メディア学科の河原講師に「eスポーツを通じた教育実践の取り組み」として、また「SD活動の取り組み」として安倍事務局長にそれぞれ報告を依頼していましたが、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、FD・SDフォーラムの開催は中止となりました。

### 6. おわりに

私は本小委員会の小委員長を2年勤めましたが、2019年3月末で交代となりました。教職員のみなさまには、これまでの活動へのご協力に感謝申し上げます。2020年度から新しい体制となりましたが、引き続き活動へのご協力をいただきますようお願い申し上げます。

## ICT活用による教育イノベーション推進 小委員会の活動報告

経営情報学部 システム情報学科  
教授 長尾 光悦

本小委員会は、北海道情報大学の学生にとって有効なICT教育環境を検討するため、平成30年度から設置されているものです。現在、本学では、学生へのタブレットPC、及び、iPadの無償貸与や、学習支援のためのeラーニングシステムであるPOLITEの運用、教育改善のPDCAサイクルを実現するためのCanvasの運用、電子教科書の導入など、様々なICTを活用した教育環境の実現と運用を実施しています。しかしながら、学生の多様化やアクティブラーニングをはじめとする新しい教育方法の浸透などによって、現在提供している教育環境を時代にあった適切なものに改変していくことが必要とされています。本小委員会では、本学のICTを活用した教育支援環境を見直し、より効果的な環境の実現を目指しています。

全学的な改善を行うことを目指しているため、以下のように各学科から1名以上、事務局から1名の委員を選定し、計9名で小委員会を構成しています。

### 【構成メンバー】

委員長：

長尾 光悦（システム情報学科）

委員：

内山 俊郎（システム情報学科）

向原 強（先端経営学科）

酒井 雅裕（情報メディア学科）

安田 光孝（情報メディア学科）

藤原 孝幸（情報メディア学科）

松田 成司（医療情報学科）

齋藤 静司（医療情報学科）

市川 泉（情報センター事務室）

令和元年度は、全3回の小委員会を以下の通り開催しました。

### 【開催日】

第1回小委員会 令和元年 5月28日開催

第2回小委員会 令和元年 7月31日開催

第3回小委員会 令和元年 10月25日開催

令和元年度は、ターゲットを「貸与デバイスの検討」、「新POLITEへの移行準備」、「Canvasの改

修」の3つに焦点を当て議論、検討を実施しました。

### 貸与デバイス

本学では、現在、先端経営学科、及び、システム情報学科の学生に対してタブレットPC、情報メディア学科、及び、医療情報学科の学生に対してiPadを4年間無償貸与しています。現在の各学科におけるデバイスの利活用状況について調査し、令和2年度に貸与するデバイスの検討を行いました。

貸与デバイスを検討するにあたり、タブレットPCは、令和元年度からiPadに代わり貸与されているデバイスであるため、システム情報学科の学生に対して、貸与デバイスに関するアンケート調査を実施しました。アンケートにはシステム情報学科の1年生62名が回答しました。アンケート調査の結果は以下のようにになりました。

問1 情報大学ではiPadやタブレットPCを貸与していますが、これは必要だと思いますか。	
必要	79%
どちらかといえば必要	11%
どちらとも言えない	8%
不要	2%
問2 iPadやタブレットPCの貸与期間は1年生から何年生まで必要ですか。	
1年生の間のみ	3%
2年生終了まで	6%
3年生終了まで	10%
4年生終了まで	81%
問3 貸与されているタブレットPCを利用していますか。	
常に利用している	42%
利用している	40%
少し利用している	11%
あまり利用していない	2%
利用していない	3%
全く利用していない	2%
問4 大学に貸与タブレットPCを持ってきていますか。	
毎日持ってきている	85%
週に3、4回持ってきている	8%
週に2、3回持ってきている	5%
全く持ってきていない	2%

問5 貸与タブレットPCの重さは重いですか。	
とても重い	21%
重い	19%
やや重い	32%
どちらとも言えない	18%
やや軽い	5%
軽い	3%
とても軽い	2%
問6 システム情報学科と先端経営学科ではタブレットPCが貸与されていますが、情報メディア学科と医療情報学科ではiPadが学生に貸与されています。システム情報学科で貸与されるデバイスはどちらが良いと思いますか。	
タブレットPC	50%
どちらかといえばタブレット	15%
わからない	18%
どちらかといえばiPad	11%
iPad	6%

アンケート調査の結果からシステム情報学科においてはタブレットPCが有効に活用され、iPadよりもタブレットPCの貸与を希望する学生が多いことが明らかとなりました。

このアンケート調査の結果、及び、各学科のデバイスの利活用状況に基づき令和2年度に貸与するデバイスを検討しました。検討の結果、令和2年度は、全学科においてタブレットPCを貸与することが決定されました。

全学科でのタブレットPCの貸与が決定されたため、各学科の要望、価格、スペックの面から貸与タブレットPCの機種を検討しました。また、実際の機器を購入し、要望が満たされているかを確認しました。検討の結果、令和2年度の貸与機器としてDELL社製のタブレット型PCであるDELL Inspiron 11 3195 2-in-1（以下、図参照）を採用することとしました。

加えて、全学科においてタブレットPCが貸与されることとなったため、現在、教室やゼミ室に設置されているノートPCの廃止について検討を行いました。検討の結果、105教室、図書館、ゼミ室などに設置されているノートPCを順次廃止していくこととしました。



出典：Dell Webサイト

### POLITE

本学では、eラーニングシステムPOLITEが運用されています。POLITEは、初期バージョンであるPOLITE、次期バージョンであるPOLITE2の二つが運用されていますが、令和2年度よりこの二つを廃止し、新たなPOLITEを運用することになりました。

このため、令和元年度は、いくつかの実際の講義において新POLITEの試験運用を行いました。試験運用の結果、大きな問題もなく適切に動作することが確認できました。これを受け、令和2年度4月より全講義で利用できることになりました。また、実運用に向け、教員へのPOLITE両説明会を2回開催しました。

### Canvasについて

現在、講義におけるPDCAサイクルを実現するためのシステムであるCanvasが運用されています。現在のCanvasは、Adobe FLASHを利用して構築されています。Adobe FLASHは2020年に終了するため、Canvasを改修しなければならなくなりました。

この改修に伴い、現在のCanvasにおける機能改善について検討を行いました。各学科から意見収集を行い、その結果に基づき、HTML5をベースとしてCanvasの改修を行いました。新Canvasは、令和2年度より実運用されることとなりました。

## 新しい教育方法検討小委員会の活動報告

情報メディア学部 情報メディア学科  
教授 隼田 尚彦

### 1. はじめに

新しい教育方法検討小委員会では、教務委員会から依頼のあった110分授業についての検討や、カリキュラム編成の問題点や主体的学びに関わる教育方法、上位学生（浮きこぼれ）の育成方法、国際的な人材育成、修学意欲をかきたてる教育環境などについて検討しました。ここでは、主に「授業時間の変更」と「時間割配置と学期制」、「浮きこぼれ対策案」について取り上げます。

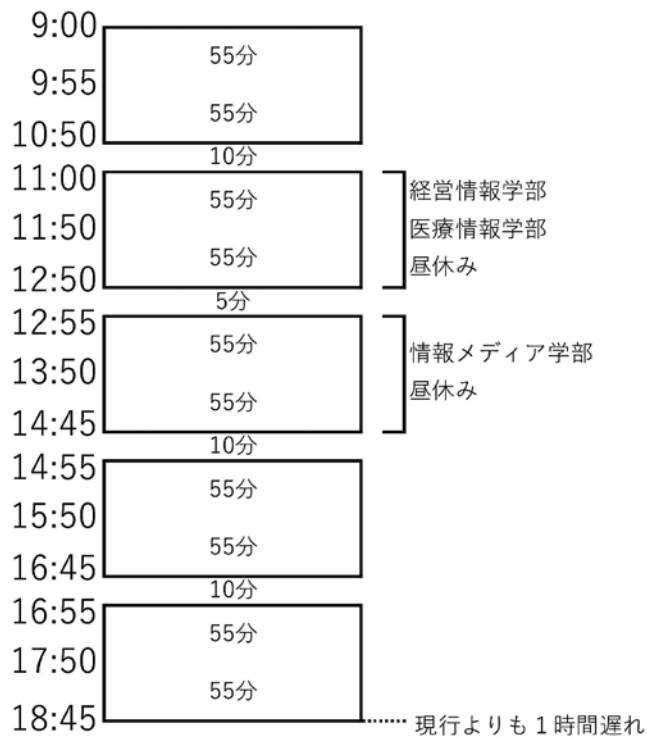
### 2. 授業時間の変更に関する検討について

教務委員会から「90分から授業時間を延長し開講コマ数を減少させること」を検討することが求められていました。他校の先行事例については、教育方法調査サブWGの纏めた報告が、平成30年度第11回FD委員会資料（平成31年2月27日実施）に掲載されています。今回は、それを元に実際に本学で実施する場合のシミュレーションを行いました。

提案の具体的なコンセプトは、以下の通りです；

- ① 試験週を含めて、前後期をそれぞれ13～14週で開講することで、従来よりも1～2週間早く終了する。→できる限り猛暑を避けて授業を行う。
- ② 土日祝日での振替授業を減らす。
- ③ 出張等に伴う補講を減らす。
- ④ 昼休みを分け、食堂の混雑を緩和する。

1日の時間割（案）は以下の通りで、統一の昼休みをなくし、学部別等の昼休みを設定します。例えば、図では、経営情報学部と医療情報学部が10：50～12：55、情報メディア学部が12：50～14：45となっています。これにより、5講目の終了時間が現行制度に比べて100分遅くなるのを60分の遅れに抑えることができます。



1日の時間割（案）

現行制度よりも1～2週間早く前期が終了するため、これまで室温が30度を超え熱中症が心配された7月下旬からお盆前には、エアコンが設置されている実習室とeDCタワーで集中講義を開講することができます。プログラミング教育など集中的に教育することで効果が見込める演習科目などを配置することで、実習室の混雑緩和にも寄与すると考えます。

補講を組むのが難しいため学期中の出張もしづらくなっている昨今ですが、110分授業にすると110分×13回=1,430分となり、90分×15回=1,350分を計算上80分上回ります。つまり、13回で試験まで終わらせることが可能となります。学年暦上は14コマで設定してあるので、出張等で1コマ休講にしても、補講の日程調整が不要となるメリットもあります。補講の必要がなければ、7月20日前後に学期を終えることが可能です。後期の開始時期を2週間早めれば、後期も12月末には終了できるため、降雪による交通機関の乱れの影響を防ぐことも可能となります。後期の成績確定を早めることも可能となり、卒業の危うい学生への対応が容易となるメリットもあります。

また、時間に余裕があるため、110分を各教員が運用で55分程度に分け、数分の休憩時間を挟むことも可能なため、学生の集中力にも配慮できます。この他、集中力に関する懸念は、アクティブラーニングの組み込みなど、授業設計でも対応可能です。

学部合同科目や他学科科目の受講への対応として、昼休みにかかる時間帯を外す必要があり、また昼休みの各種イベントについて、日程を調整する必要はあります。

蒼天祭や体育祭などは、学期のスケジュールに合わせて検討すると、学期間に授業の無い日を設けることが可能となります。

### 3. 時間割配置・4学期制について

時間割を組むのが難しいのが、現状の問題点として挙げられます。また、4学期制にしても学生の負荷が変わらないか増加しています。これは、2学期制と4学期制の混在によるものであると考えられます。混在することで、授業が均等に分散せず、どちらかにより多くのコマ数が配置されます。これにより時間割も組むのが難しく、学生も負担が増す学期が出現しています。

そこで、全学的に一度4学期制を導入し、その効果を確認することが必要と考えますが、なかなかハードルが高いのが現状です。半期科目は、2科目に分割（単位も半分に）して配置すると比較的容易に4学期化が可能であり、移行期としてこの方法は有効ではないかと考えます（学生にとっても、単位修得のハードルが低くなるため、脱落防止効果も見込めます）。

なお、プロジェクト科目などの演習は、同一学期に複数履修させないようにしないと負荷が2学期制よりも大きくなるので注意が必要です。

eラーニング科目などを現行カリキュラムに組み込み、対面授業科目を減らす工夫も考えるべきです（通教科目の単位認定拡充やCOVID-19対策で作成した遠隔授業コンテンツの有効利用など）。今回の

遠隔授業における知見も活かせるでしょう。

カリキュラムの妥当性を検討するにあたり、2学期制・4学期制が混在している状況下では、その判断が難しいと考えます。時間割の適正化も含めて、まずは全学的に4学期制への移行を一旦完了してカリキュラム運営上の不要な障壁を取り除くことが、学生への負荷の軽減のみならず、教員の負荷の軽減にも繋がると考えます。その上で、どのような科目を2学期連続科目とすべきか、どのような科目を4学期科目とすべきかなども含めたカリキュラムの妥当性を検討すべきです。併せて、すでに議論が始まっていますが、キャリアサポートの扱いも就職課や就職委員会、教務委員会と連携を取りながら検討する必要もあるでしょう。

完全な4学期制へのハードルは高く、小委員会内でも異論も含め様々な意見が混在していますが、少しでも良い状況に進めながら、次年度に完成年度を迎える17カリキュラムの検証を行いたいと考えています。

### 4. 浮きこぼれ対策(案)について

入学者の学力格差が拡大しており、下位学生のケアに忙殺され、上位学生のケアが不足気味になっています。

これまでは、ゼミのほか、国際コラボレーションやenPiT、CDIO Academy、DEMOLAといった正規カリキュラムや課外プロジェクトで対応していますが、十分に拾いきれていないのが現状です。また、他校の学生とのプロジェクトでは、専門基礎学力の不足が露呈しており、低学年から鍛えるカリキュラムが必要と考えます。

enPiT参加者へのアンケートやCDIO Academy参加者へのインタビューから、上位学生にとって、PBLがモチベーション向上や実力の認識に良い影響を与えていることが分かります。ただし、通常の授業と並行してプロジェクトを行うことがかなりの負荷となっており、十分な成果に結びつかない学生



も見受けられるのが現状です。そのため、PBLに対する単位を大幅に増やし、一定期間、PBLに集中できるようなカリキュラムを作ることが必要となります（フィンランドでは、同様の学部横断もしくは大学横断のPBLプログラムがあり、参加学生はその間は毎日PBLに集中します。そのプロジェクトに対して、30単位ほどの単位が付与されます）。また、このようなカリキュラムを設置することで、海外からの短期留学生の受け入れも容易となり、国際化・英語化へも寄与すると考えられます。

そこで、学部横断（学部横断である必要はないという意見も）で、上位学生を鍛えるプログラムを創設し、入学上位者のうち、希望する者を割り当てます（所属はあくまで各学科）。対象者は、一般入試成績上位者や、他大学で行なっている奨学生入試的な特別選抜などの合格者をイメージしています。また、1、2年次の成績上位学生から候補者をGPAと適性などで選抜し、希望者は途中参加可とします。この際、学力のほか、やる気や興味、プロジェクト系科目への適性などを総合的に判断する必要が有ります。

学生は、所属学科のカリキュラムに加えて本プログラムを受講できるものとします。学科を超えた学力上位学生向けの科目設定として、英語・統計学などや専門基礎の内容を強化する科目を配置します。PBLの準備教育として、デザインシンキング・プログラミング・デザイン教育などを含みます。学部・学科横断の大きなプロジェクトを半年～1年かけて実施します。プロジェクトに対して数十単位を付与しますが、不合格のリスクを避けるために、細かく複数のフェーズに分けて単位認定するような工夫が必要かもしれません。プロジェクトベースだけでなく、研究ベースのプログラムの設置も考えられます。また、内容は、AI、ビッグデータなどのトレンドを意識したものとし、社会や学生のニーズにこたえます。学外の教育リソースも積極的に活用することが考えられます。1学期～半年程度の海外留学や企

業インターンシップを設定し、単位を付与します。

本プログラムは、海外大学のオナーズプログラムのような位置付けで、各種奨学金（学費全免、半免、留学資金免除、各種学外イベント、インターンシップや学会などへの参加の金銭的支援など）や海外大学の様に学内各種アルバイトとセットになった奨学金の創設も考えられます（例えば学費全免の代わりに、週10時間の学内労働など）。

## 5. おわりに

このほか、シラバス記載ベースで、約6割の科目がアクティブラーニングを導入していることがわかりました。

COVID-19対策でRubric Dayが延期になったりしましたが、この危機をFDの好機と捉えて進めていきたいと考えます。

## 2019年度SD活動報告

SD委員会 委員長 安倍 隆

2019年度（令和元年度）のSD活動として、学内で開催したSD研修会と、学外の研修会への参加状況等について、以下に報告します。

### 1. 学内でのSD研修会の開催

次の5件のSD研修会を学内にて開催しました。

#### (1) 講演会「ハラスメント防止研修」

- ▶日時：2019年7月2日(火) 16:30～18:30
- ▶場所：北海道大学高等教育研修センターからのネット中継を本学115教室で受講
- ▶内容：ハラスメントにはどんな種類があるのか、なぜハラスメントが起きてしまうのかなど、セクハラとパワハラを中心に知識を深めた。また、ハラスメントを未然に防ぐための、相手とのよりよい関係を築くコミュニケーションの基礎についても、実践を通して学んだ。
- ▶講師：森 順子 氏（株式会社ハッピーアロー代表取締役）
- ▶参加人数：本学教職員35名

#### (2) 講演会「野幌森林公園のヒグマとの付き合い方 ～出会ったらどうする？ 出会わないようにするには？～」

- ▶日時：2019年7月11日(木) 16:15～17:45
- ▶場所：本学211教室
- ▶内容：本学キャンパス内にてヒグマが目撃され、近郊でも目撃や足跡などが発見される状況が続いていたため、急遽、ヒグマの生態と管理に関する専門家をお呼びして、学生や私たちはどうすれば安全に大学生活を送ることができるかについて学んだ。
- ▶講師：佐藤 喜和 氏（酪農学園大学 農食環境学群 環境共生学類 教授）
- ▶参加人数：本学教職員29名 他HiIT職員や学生10名

#### (3) セミナー「大学職員のためのPDF」

- ▶日時：2019年9月6日(金) 13:30～15:30
- ▶場所：本学画像メディア実習室
- ▶内容：PDFの基本から、企業でも行われているPDFのセキュリティ対策について、さらにAcrobatによる長期保管用のPDF/A、エンジニアリング用のPDF/E、印刷用のPDF/Xや障がいのあるユーザーが使いやすいように、様々なアクセシビリティ標準に準拠したPDFを作成する方法などを学んだ。
- ▶講師：富崎 太一 氏（アドビシステムズ株式会社 カスタマーサクセスマネージャー）
- ▶参加人数：本学教職員10名

#### (4) 講演会「キャンパスにおける身体のケア」

- ▶日時：2019年9月13日(金) 15:30～17:00
- ▶場所：北海道大学高等教育研修センターからのネット中継を本学115教室で受講
- ▶内容：予防医療の重要性に関する講演に加え、器具を使わず職場や自宅で簡単に実践できる実技を交えた内容について学んだ。
- ▶講師：都竹 茂樹 氏（熊本大学 教授システム学研究センター教授）
- ▶参加人数：本学教職員15名

#### (5) eラーニング「情報セキュリティチェックテスト」

- ▶実施期間：2020年3月9日(月)～3月31日(火)
- ▶実施方法：NPO日本ネットワークセキュリティ協会のサイトにあるeラーニングを利用
- ▶内容：1回25問の4択問題。90点以上で合格とし、90点未満の場合は再受験が必要となり、合格するまで実施する。問題はランダムで2回、3回と受験するとさらにリテラシーは向上する。回答後に不正解の問題の解説を見て理解を深める。
- ▶参加人数：本学教職員全員が対象（後日、情報センターで受験状況のチェックを行う）

### 2. 学外の研修会への参加

#### (1) 私立大学協会北海道支部主催事務職研修会への参加

道内の私立大学が加盟する私立大学協会北海道支部では、事務職員を対象とした階層別研修会を年4回開催しており、本年度は本学職員を次の3つの研修会に、全7名参加させました。

##### 1) 初任者研修会「私立大学職員としての初任者心得～基礎知識の習得～」

- ▶参加者：似鳥克馬（通信教育部）、上部拓武



- ▶ (学生課)、高橋 廉 (入試課)
- ▶ 開催日時：2019年6月6日(木)～7日(金) 2日間
- ▶ 開催場所：ホテル札幌ガーデンパレス
- ▶ 講義内容：「私立大学職員の基本心得」「私立大学の歴史」「応接とその心得」「私学関係法令の解説」「学校法人会計基準の基礎」「学生からの相談への対応について」など
- ▶ 参加人数：18大学70名



## 2) 中堅指導者研修会「私立大学の諸情勢と中堅指導者の役割～リーダーとしてのスキルアップ～」

- ▶ 参加者：大山康成 (入試広報課)
- ▶ 開催日時：2019年7月11日(木)～12日(金) 2日間
- ▶ 開催場所：ホテル札幌ガーデンパレス
- ▶ 講義内容：「中堅指導者に期待すること」「職場の対人コミュニケーションとリーダーシップ」「研究討議・班別研修」など
- ▶ 参加人数：20大学29名

## 3) 課長職相当者研修会「管理職の役割とリーダーシップ」

- ▶ 参加者：松尾俊樹 (学生課)、矢埜博隆 (入試広報課)、石田英弘 (法人本部経理課)
- ▶ 開催日時：2019年7月25日(木)～26日(金) 2日間
- ▶ 開催場所：ホテル札幌ガーデンパレス
- ▶ 講義内容：「管理職のためのメンタルヘルス講座」「私立大学が直面するリスクマネジメント」「管理職に求められる職場のマネジメント」「研究討議」など
- ▶ 参加人数：15大学32名

## (2) 私立大学通信教育協会主催大学通信教育職員研修会への参加

通信教育課程を有する全国の私立大学・短期大学・大学院が加盟する私立大学通信教育協会では、初任者・中堅実務者を対象に年1回大学通信教育職員研修会を開催しており、本年度は通信教育部事務部職員1名を参加させました。

- ▶ 参加者：木村 肇 (通信教育部)
- ▶ 開催日時：2019年10月10日(木)～11日(金) 2日間
- ▶ 開催場所：京都ガーデンパレスホテル
- ▶ 講義内容：講演「京都造形芸術大学の『手のひら芸大』の教材政策から学習支援における職員の役割について」「グループ討議(入学・編入学審査と学生サービスについて、授業・試験並びに成績)・全体会」など
- ▶ 参加人数：全国の大学・短期大学・大学院などから全53名参加

## (3) 北海道大学高等教育研修センターで実施するセミナー等の参加案内

北海道大学の高等教育研修センター (<https://ctl.high.hokudai.ac.jp/>) では、大学教職員を対象としたFD・SDに関するセミナーを年間50講座以上開催しています。本学でもニーズの高いテーマであることから、セミナー開催の情報を適宜全教職員に連絡して、参加を呼び掛けています。本学からはテーマによっては複数名参加するなど、北海道大学以外の参加者としては多くの教職員が参加しています。

## 3. 今後のSD活動について

### (1) 学内研修会の計画的な開催

学内で開催したSD研修会の内容は、「教務領域の知見の獲得を目的とするもの」のように、すぐに役に立つものが比較的多く、大学認証評価第3期においては、現在(他大学でも)あまり実施されていない「戦略的な企画能力の向上を目的とするもの」と「マネジメント能力の向上を目的とするもの」の2つが求められると言われています。

今後は、文部科学省から指針(「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」や「私立大学等改革総合支援事業」など)の要件を満たすことも意識して、計画的に学内研修会を企画していきたいと考えています。

### (2) 北海道FD・SD協議会の活用

本学も加盟している「北海道FD・SD協議会」(事務局：北海道大学高等教育研修センター)に対して、今後さらに積極的に関わっていく予定です。本学からも研修内容のリクエストをすると共に、共同で研修プログラムを開発する等、本学にとっても有益な研修会の開催を目指します。

また、北海道大学高等教育研修センターにて開催する各種研修会への参加をさらに促進したいと考えています。

## FD・SD活動 行事実績 (2019年度)

日 程	行 事
4月18日(木)	第1回新任教員研修会①-1
4月25日(木)	第1回新任教員研修会①-2
5月7日(火)～8月2日(金)	前期ピアレビュー実施期間
5月15日(水)～7月17日(水)	イングリッシュラウンジ (10回実施)
5月24日(金)～6月13日(木)	前期 (前半) 授業評価アンケートの実施
6月24日(月)～6月28日(金)	第15回CDIO International Conference参加
7月2日(火)	SD研修会 (ハラスメント防止研修)
7月11日(木)	SD研修会 (野幌森林公園のヒグマとの付き合い方)
7月12日(金)～7月13日(土)	TOEICチャレンジ600
7月22日(月)～8月8日(木)	前期 (後半) 授業評価アンケートの実施
8月9日(金)	2019年度ICT利用による教育改善研究発表会参加
8月12日(月)～8月17日(土)	enPiT2サマースクール (公立はこだて未来大学) 参加
9月6日(金)	SD研修会 (大学職員のためのPDF)
9月6日(金)	北海道FDSDフォーラム2019にて報告 (山北FD委員会委員長)
9月11日(水)	第1回新任教員研修会②-1
9月13日(金)	SD研修会 (キャンパスにおける身体のケア)
9月18日(水)	2019年度第1回江別市内四大学共同FD研究会参加
9月26日(木)	第1回新任教員研修会②-2
10月1日(火)～1月17日(金)	後期ピアレビュー実施期間
10月16日(水)～12月18日(水)	イングリッシュラウンジ (10回実施)
10月28日(月)～11月19日(火)	後期 (前半) 授業評価アンケートの実施
10月31日(木) (10月28日～11月1日)	第3回 (2019年度) 北海道情報大学イングリッシュデー実施
11月21日(木)	第2回新任教員研修会
12月6日(金)～7日(土)	enPiT2プロジェクト学習成果発表会 (はこだて未来大学)
12月14日(土)	enPiT2北海道・東北グループ合同発表会2019 (室蘭工業大学)
12月20日(金)	TOEICチャレンジ600
1月6日(月)～1月27日(月)	後期 (後半) 授業評価アンケートの実施
1月16日(木)	イングリッシュフォーラム
1月30日(木)	CDIO2019報告会
2月6日(木)～2月14日(金)	学内英語化検討WGアンケート調査の実施
3月9日(月)～3月31日(火)	SD研修会 (eラーニング 情報セキュリティチェックテスト)

## FD委員会、小委員会等の活動実績(2019年度)

委員会・WG名	月例ミーティング等日程
FD委員会	4/24(水)、5/31(金)、7/29(月)、9/26(木)、10/24(木)、11/22(金)、12/25(水)、1/23(木)、2/21(金)、3/27(金)
イベントの企画・実施小委員会	4/19(金)、10/18(金)、1/22(水)
ICT活用による教育イノベーション推進小委員会	5/28(火)、7/31(水)、10/25(金)
新しい教育方法検討小委員会	9/17(火)
学内英語化検討WG	10/2(水)
新世代の学生に対応する教育環境検討WG	5/16(木)、7/18(木)、9/19(木)、11/21(木)、1/16(木)

### 編集後記

本学にFD委員会が発足して以来、本学のFD活動推進に関わってきたのですが、振り返ってみると無力感に苛まれます。それでも、ニューズレターを読み返すとき、多くの教員が様々なFD活動に携わっている様子が伺えます。どうやら、本学にはFD活動が日常のこととして根付いてきているようです。日々の活動を時々FDの視点で振り返ってみる、そういったスタンスが我々とFD活動との良い距離感かもしれないと感じる今日この頃です。

情報メディア学部 情報メディア学科 教授 山北 隆典